

2016年のモンゴル国農牧業の動向

小宮山 博

はじめに

モンゴル通信¹では、モンゴル国の2016年における国内重大ニュースとして、「総選挙の結果、人民党が予想外の大勝」、「ASEM首脳会合、成功裡に開催」、「エルデネト銅鉱山、所有率100%モンゴル側に」、「モンゴル・日本経済連携協定、正式に発効」、「付加価値税法改正法案、1月1日より施行 購入金額の2%の還付と1億トゥグルグの宝くじも」、「国内の小麦需要を完全に満たす」、「ダライ・ラマ14世 9度目のモンゴル訪問」、「リオ五輪で銀、銅メダルを獲得」、「オペラ歌手アリウンバートル氏 チンギス・ハーン勲章を」、「メガプロジェクトの新国際空港とオユトルゴイ坑内掘事業」をあげている。良い話題ではないので、ここでは取り上げられていないが、「経済危機」も2016年の重大ニュースであろう。このモンゴル通信の重大ニュースにも農牧業が含まれているが、本稿では、それも含め、2016年における農牧業に関する重要な動向について紹介する。

1. 家畜飼養頭数は史上最高を更新

モンゴル国の家畜頭数²は、2015年末に5,598万頭にまで増加し、馬、羊、山羊は過去最大の頭数を記録した。モンゴル国では申年の冬は寒さが厳しく、雪が多く、寒雪害（ゾド）になるという昔からの言い伝えがあり³、2016年は申年であることからゾドの被害が心配されたが、幸い大きなゾド被害もなく、夏に降雨が多く、草の生育が良かったこともあり、2016年は家畜頭数がさらに増加した。2016年末の家畜頭数は、6,154万頭と前年より556万頭（9.9%）も増加し、畜種別ではラクダ40万頭、馬363万頭、牛408万頭、羊2,785万頭、山羊2,557万頭とそれぞれ前年を上回り⁴、ラクダ以外のすべての畜種で過去最大の頭数となった。モンゴル国では家畜頭数を羊に換算⁵することがあるが、2016年末の家畜頭数は羊換算で1億282万頭にも達している。モンゴル国の自然草地で許容される放牧頭数（牧養

¹ モンゴル通信2016年No.52.

² 「五畜」と言われるラクダ、馬、牛、羊、山羊の頭数である。毎年12月に国家統計局による家畜頭数等の調査が行われている。

³ モンゴル通信2016年No.01.

⁴ モンゴル通信2017年No.01.

⁵ 飼料の必要量から、ラクダ1頭を羊5頭、馬1頭を羊7頭、牛1頭を羊6頭、山羊1頭を羊0.9頭に換算。

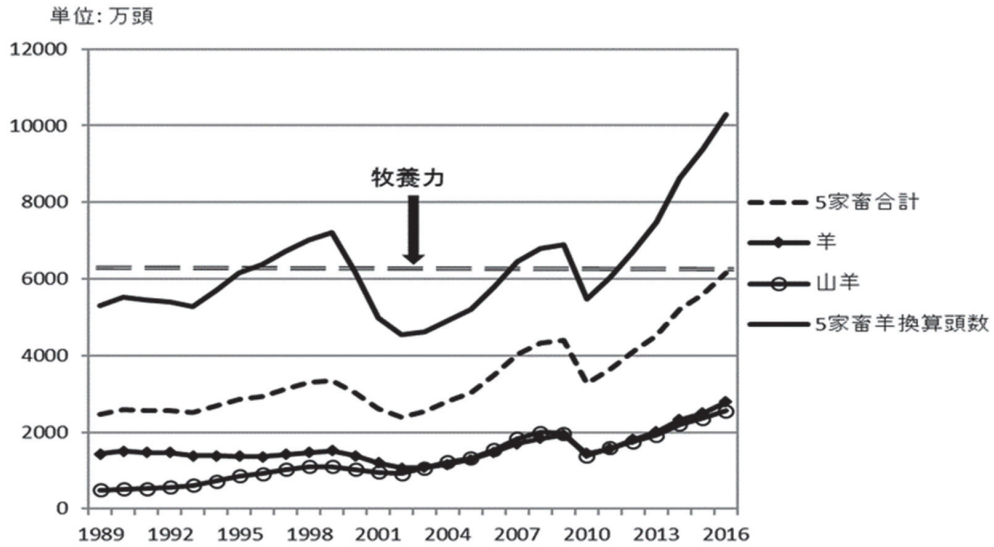


図1 5家畜合計、羊、山羊、5家畜羊換算の頭数の推移
出所：NSOM, *Mongolian Statistical Yearbook* (各年版)

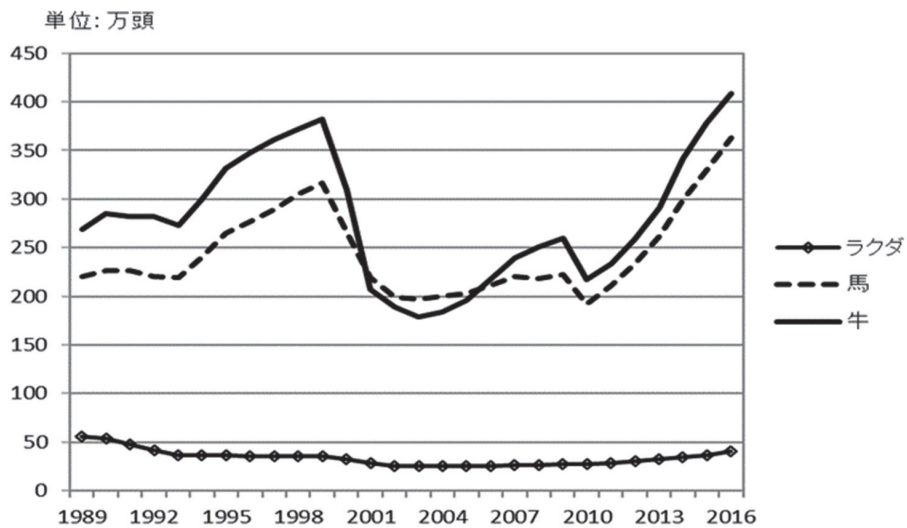


図2 ラクダ、馬、牛の頭数の推移
出所：NSOM, *Mongolian Statistical Yearbook* (各年版)

力)は、6,200万頭程度という調査結果⁶もあり、2016年末の羊換算算頭数は、これを66%も上回っている。

⁶ モンゴル国畜産研究所は、1993年における自然草地生産量の調査結果からモンゴルの羊換算牧養力は6,220万頭としている。このほか、8,130万頭とか5,000万頭台という牧養力の推定もある(鈴木、2015)。

市場経済化以降、家畜頭数が急増する中、1999/2000年～2001/2002年と2009/2010年の冬春期に大きなゾド被害に見舞われた。ゾド被害の直前の家畜頭数が、それぞれ羊換算で7,199万頭（1999年末）、6,893万頭（2009年末）と牧養力（羊換算6,200万頭）を大きく上回り過放牧状態となっていたことが、ゾド被害の引き金となったと筆者はとらえていたが、ここ数年の家畜頭数の急増は、これまでの見方では説明がつかなくなっている。ゾドの被害がなく、家畜頭数が増加することは、個々の牧民にとっては喜ばしいことであろうが、モンゴル国全体で見れば、草原への負荷の増大（砂漠化）、家畜価格の低迷、ゾドのリスクの増大など、安定的な牧畜を脅かすものである。モンゴル政府は家畜頭数の増加に懸念もっているが、牧民が飼養する家畜頭数を抑制するための具体策がないのが実情である。

2. 食肉輸出の低迷

上述のようにモンゴル国の家畜頭数は近年の急増し、史上最高を更新している。この家畜頭数を抑制するための重要な柱は、食肉輸出の拡大である。このことにより、草原への負荷が低下するとともに、牧民の所得が向上し、一石二鳥である。このような背景からモンゴル政府等による中国やロシア等へ食肉輸出を拡大するための取り組みが行われている。2015年11月にエルベグドルジ大統領が中国を公式訪問し、『加熱加工の牛肉、羊肉、山羊肉の輸出と輸入に関する覚書』⁷に署名し、加熱加工の牛肉、羊肉、山羊肉の輸出が可能になった。2016年2月19日には、ゴビアルタイ県ボルガルスタイ国境検疫所においてオブス県の食肉加工処理所が準備した17トンの羊肉の輸出が正式に開始し、今後は、羊肉だけでなく、馬肉、牛肉、山羊肉の輸出が実施されるとのことである⁸。しかしながら、このような新たな展開が見られた中で、2016年11月14日に食糧・農牧業・軽産業省が2016年度の食肉輸出量推計値が約5,100トンであると公表した。輸出量が冷え込んだ理由を2016年度にウイルス3種による家畜伝染病が発生したことで中国政府の食肉輸入に対する規制が反映したとの見方がある。P.セルゲレン大臣は、ロシア訪問で同国向け食肉輸出増量を要請したことを明らかにした。また、モンゴル国においては法的環境の改善に努めるとした。同時に動物検疫に関する法律の一部改正を行うとした⁹。

2016年8月に新政権のもとで国会承認された“Action Program of the Government of Mongolia for 2016-2020”では、「食肉の輸出を5万トンまで拡大し、牧民世帯収入の増加」を目標として掲げている。2016年の5,100万トンの輸出は、2015年の4,700トンをわずかに

⁷ モンゴル国は重要家畜疾病である口蹄疫の清浄国ではないため、偶蹄類の家畜の肉を輸出する際には、一般的に、輸出先国から加熱処理が求められる。なお、馬は口蹄疫に感染しないため、生肉でも輸出可能である。

⁸ モンゴル通信2016年No.08.

⁹ モンゴル通信2016年No.46.

上回るものの、目標からははるかにかけ離れたものである。

一方、ここ一年間で400トンの食肉がオーストラリア、ニュージーランドから輸入されており、高級レストランで利用され、一部は個人が注文しているという¹⁰。

3. 小麦の豊作

2015年は、播種期から初期生育期の5～6月に降雨が少なく、深刻な旱魃になったことに加え、その後の猛暑も重なり、小麦の収穫量は20万4千トンにとどまる記録的な不作となり、政府は2016年に12万5千トンの小麦と4万300トンの小麦粉を輸入することを決定した¹¹。2016年は、7月末から8月上旬にかけての猛暑が小麦の生育に悪影響をもたらすことが心配されたが、セレンゲ、トゥブ、ダルハン・オール、オルホンなどの主産県においては好適な夏であったため、豊作となり¹²、46万700トンの小麦が収穫された¹³。政府が目標とする40万トンを上回っており、国内の小麦需要を満たすことができる。

おわりに

鉱物資源の高騰により2011年から数年にわたり急激な経済成長を見せたモンゴル国であるが、現在は鉱物資源の下落等による危機的な経済状況にある。このような中で、農牧業が持続可能な産業として再び注目されており、付加価値を高めた農牧産品の輸出による外貨獲得が期待されている。家畜頭数は史上最高を更新し、輸出のための原材料は豊富にあるものの、家畜伝染病の多発が輸出を妨げている。今後のモンゴル国の牧畜業の発展は、家畜感染症に対する取り組みの成否にかかっているといても過言でないであろう。

(引用・参考文献)

小宮山博(2016)「モンゴル国農牧業の最近の動向」日本とモンゴル50(2)、pp.2-9.

鈴木由紀夫(2015)「モンゴルの家畜頭数の増加とその特徴」日本とモンゴル49(2)、pp.26-36.

National Statistical Office of Mongolia (NSOM) (2016) : *Mongolian Statistical Yearbook 2015*. Ulaanbaatar. 413p.

(一般社団法人 海外農業開発コンサルタンツ協会)

¹⁰ モンゴル通信2016年No.50

¹¹ モンゴル通信2016年No.08

¹² モンゴル通信2016年No.34

¹³ モンゴル通信2016年No.52